土左改田白蓮社

蓮然寓

無盡菴冒三撰

特別
へ5
6590
11

へ5
6590
11

霊山上人巻之書画を大いに又俳諧之於
てこれを邦国之及ぶ事一年に浅草雲竜
の杉庵風菴の旅宅を訪ひ此て保之年
れ玄に高祖の一千遠忌と法華教を護国寺之
絆しそれより有馬入湯して霊山朱迎
院法貴の杖之杖とこれを秋の比を病
床之臥しぬ暫く寓居自朝昼晩
六十餘年安楽の化縁つきて高祖乃
入寂の日に永眠を待ちあん年も其
辛夜八節とも言へ彼山にて亡れ故国
之帰りしの時に六年の志を訃音を他
に到舊好旅を問へ遠へ桂越しにて
とあれも亦あ氏式夏之里杖を彼山之曳て
去年に旅中に笑を明と呼とり涙を拭
惰之来て血を注ぎの書蜀魂と序偈を
てる高ぎの光陰矢のごと早く八祥忌
まれに消ぬ名をこゝにねびやりぎれ書

と舊孫の法風士に書画之味會を業と
他に二百顔の追堂を為し一枝得形念乃
辟世之顔を賡き経会紀一巻を伴ふ
載に霊魂を慰ぶ旦暮の法風士之上人
の俗化を啓を謂ふんと法の乞士等尽
葬貫三日旅の因をおこなへ天保七申
年冬至後月朔城愚拙首と白

蓮れ実や何ぞ人の元の玉　霊山
国れ日のこゝも寂光　星水
跡しうとて茶噴に宿りて一雨
眉かく蝶のまれ白まよりり好古
帝をきて立つやたれ名のり風国
潮音に鶯の好よむ是　星桃
今連振神れ出留るれ詠ぎりと　月海
冥ひし頃に新れ支　月　壹友

[illegible]の[illegible]より[illegible]る[illegible]合志 佐雨
茶れ梅時の今 鷹の爪 弘宣
七りしもかきしの花より時雨雀 其池
海を有る温泉より遠留 可流
下る紅より紫菜の歌と呼ハあ 三国
多きに あらぬ世代の金銀 妙杉
[illegible]恩より所ものきるを書ちり 西素
海をるして他名をきれ 素行
思ひもぬ君に係れ身うらく 欲古
流りる麻疹の皆やまん此 雲二
州をまんて郎西の月弘 弘阿
雲すりそうちと軍ハまる 漢南
役るれ名を者れるを恨居 素石
年ありて亜の出 焼物 費之

[illegible]をきてもの花乃[illegible]郎 志風
おもるをつく弔ひの夷 東之

太経寺行

[illegible]の[illegible]霊[illegible]より絶て
[illegible]ハ秋の日をて 桜孫[illegible]

秋風の老を知ると吹面 一雨（立華山秋）
稲熟れ移星に後を林の形、志風（初会山）
仲るの果る第山子の[illegible]南 其池（[illegible]）
江の面や秋の老りくるる 弘陽（[illegible]）
[illegible]ぬ火れ煙[illegible]て[illegible]ける、月海（立秋）
移ひて中月の咲[illegible]山こもり 星批（[illegible]）
月ひて帰[illegible]ふ野[illegible]の前 東之（五山）
生禅する完[illegible]くや麻の多 好古（五社山）
[illegible]ち[illegible]梢の海や[illegible] 鳳園

錦きる我のあり草のされ　河内山　龍雲

子まよう門すゝめや秋あらし　田村山　三国

芒葉の風ゆる宿や藤の花　下町武つ　壺友

家居や枯味噌見えい紅葉ちる、可洗

十六夜や雲茂るかと外の闇　酒素

狩られぬ亭も雪も花あらし、如杉

秋の蝶吹かれく草を放れ行　左川　素龍坊

湖辺や飛入る船のりまひ、坂田白蓮社　歌古

当方の月戸さらぬ菊の主かな、葉石

募花殺し垣のむつこや冬隣、撲富

十六夜や闇も海の汐ひかり、松二

菊も花を雨空や秋の暮、貴三

故国の分身霊前やはる

折八もし草も菊や冬近　高田山秋　星水

追加

香かくす叶や芒のみされ口　宮村　楓窗

夕霧や小笹の露で散り拾ひ、旭松

画天や地も錦しを冬十日　立納谷叔　龍苑

寒しきるやうに清き冬かな　甲浦、三江

車よりよれ消る柳かな　岸本　笠松

ひ箱の見えて出来し小麦哉　赤家　鶯仙

青しまる海や日和の冬の夕　好光　三四

文通

早稲稲早も清き夜に秋哉　京　濃吹

世話うけて日暮しき安し　らん月

匠示庵

京橋治刀